

海外投融資情報財団設立20周年を迎えて

ご挨拶

海外投融資情報財団
[理事長]神 信一
Shinichi Jin

海外投融資情報財団が設立されて、満20年が経過しました。この間、当財団設立に際し各種ご協力を賜りました発起人をはじめとする会員や財務省、国際協力銀行その他の関係者の皆さまに心からお礼申し上げます。

世界経済が貿易・資本移動の面で相互依存を増すなかで、日本からの海外直接投資は増加の一途をたどり、この間、日本からの海外直接投資残高は、2000億ドルからその4倍を超える8300億ドルにまで達しました。

振り返ってみると、当財団設立以来のこの20年は、まさに世界が激動した時代でした。1991年は冷戦の対立構造が崩壊して、世界がひとつのマーケットとしてグローバル化し、自由化が急速に進みましたが、他方金融危機、財政危機、通貨危機も世界規模で発生し、数々の想いもかけぬ激変が起きました。

20年前の大方の予想は、冷戦の勝者であるアメリカを中心とした安定した時代が到来するであろうということでした。しかしそのアメリカは9.11テロ事件以降、イラク戦争、アフガン戦争に突入、いまだその終息をみていません。経済面ではリーマン・ショックに端を発した景気停滞から抜け出せず、財政赤字に苦しみ、史上初の米国債格下げの憂き目に遭っています。

欧州はEU統合、ユーロ圏発足で安定に向かうかにみえましたが、ギリシャの財政危機に始まり欧州全体が金融危機、財政危機に陥っています。

日本もデフレ不況から脱却できずに、いまだ失われた20年の線上にあります。

先進国各国が大停滞の中、新興国がまさかこれほどのスピードで勃興し、世界経済の重要な成長

エンジンになろうとは、だれにも予想できませんでした。

日本のGDPのわずか8分の1にすぎなかった中国が、こんなに早いスピードで日本を抜いて世界第2のGDP 大国になることも、長期間停滞していたインド、ハイパーインフレ国ブラジルがこれほどのスピードで成長することも、想定外とっていいと思います。

われわれは、変化が起こった後で、後講釈で、危機や大変革が然るべくして起こったように解説しますが、20年前に立ち返って考えてみると、想定もしなかった変化の連続であったとっていいでしょう。

当財団は海外投融資の情報を、収集、分析して皆さまに提供するのが役割ですが、適確な情報の提供には、より深い洞察力が必要なことを今更ながら痛感しています。

インターネット革命により、情報はいくらでも、簡単に集まりますが、その中で本当に重要な情報は何なのか、それを選び分ける能力がますます求められています。と同時に本当の重要な情報は、手元にある情報の束のはるか向こうにあることが多いことも学びました。

国際政治経済情勢が大きく変化していくなかで、ミクロの情報にとらわれて、木を見て森を見ず、ということがないように、質の高い情報の提供にこれからも努めてまいりたいと思っています。

今後とも皆さまには本財団を大いにご活用いただくとともに、引き続きご助言もいただければ何よりと思っています。改めてこれまでの皆さまのご支援に感謝を述べさせていただき、ご挨拶に代えさせていただきます。